

茨木童子研究

川 鍋 仁 美

はじめに

茨木童子とは、酒吞童子の眷属とされる伝説の鬼神であり、歌舞伎の舞踏劇「茨木」に登場するものが有名である。話の粗筋は以下の通りである。

源頼光の四天王の一人である渡辺綱は、羅生門で切り落とし、た茨木童子の片腕を唐櫃に入れ、物忌みして誰にも会わないでいるところへ綱の伯母真柴に化けた茨木童子が訪ねてくる。いったん拒絶したものの、肉親の情に負けて家の中に入れてやり、たつての願いに唐櫃の腕を見せると鬼神の本性を現し、腕をつかんでとび去つてしまふ^{注1}

この舞踏劇は明治二年に杵屋勘五郎が作曲した長唄「渡辺綱の段」(綱館)と同内容であり、さらにそれは寛保元年に江戸中村座で演じられた「兵四阿屋造」が元になっている。^{注2}

これらの作品の原型と言えるものが、『平家物語』剣巻にある渡辺綱の鬼退治である。

話の大筋は舞踏劇「茨木」と同じであるが、一つ大きな違いがある。『平家物語』では、綱と戦う鬼に名前が無いのだ。それに加えて、酒吞童子との関係にも一切触れていない。同じ題材を扱った謡曲「羅生門」は、綱の鬼退治が大江山の鬼退治後の出来事としているが、こちらも綱の戦いの相手が茨木童子であるとは書いていない。では、その鬼が茨木童子という名を持つのはいつたい何時からなのであろう。

江戸時代、天和元年ごろに成立した通俗史書『前太平記』^{注3}にも、綱の鬼退治に関する記述がある。該当部分は次のように始まる。

諺に曰く、大江山の首領は酒顔が腹心の眷属、茨木と云ふ者なり。能く幻術を行なひ、神通変化の妖鬼なり。大江山落城

の後、帝畿東寺の羅生門に住みて、往來を妨げ人民を害す。^{注4}

酒顛というのは、言うまでもなく酒呑童子のことであり、大江山に住み、多くの美女を攫ったとされる鬼である。引用文中の大江山落城とは、源頼光が酒呑童子を倒したことだと考えるのが妥当であろう。つまり、酒呑童子が頼光によって倒された後、茨木童子は都の羅生門に住処を移し、悪事を働いたということになる。その悪事が原因となり、渡辺綱と対決するに至るのだ。『前太平記』はその鬼が茨木、すなわち茨木童子であると明確に記述している。

『前太平記』のこの章段の末尾には、著者によって次の注記が付されている。なお、原文は漢文体であるが、ここでは書き下し文にしたものを記す。

右此一章未だ其の出証を詳かにせず。之を信ずるに足らずと雖も、其の説徧く人口に在り、已むことを得ずして茲に録す。

つまり、何を根拠として言われるようになったのかは不明だが、『前太平記』が刊行された時代には、綱と戦う鬼は茨木童子であることが、広く知られていたということになる。

ここまでの情報を整理すると、謡曲「羅生門」から『前太平記』の間に、茨木童子の名が付けられたと考えられる。この間の一六〇年を埋めるために見ていきたい題材が、源頼光による酒呑

童子退治である。酒呑童子退治は源頼光が碓氷貞光・卜部季武・渡辺綱・坂田金時・藤原保昌と共に、多くの人を攫う酒呑童子という鬼を退治する物語である。この作品は大層人気があつたように、絵巻・金平浄瑠璃・御伽草子など、様々な媒体に広がりを見せている。媒体が多い分、伝本も多く、それぞれの内容に差異が生じている。その差異の一つが、茨木童子の存在である。酒呑童子退治を題材にした作品中、最も古い逸翁美術館所蔵『大江山繪詞』（通称香取本）には茨木童子の存在を見ることはできないが、享保頃に出版された渋川清右衛門板の『御伽草子』には茨木童子という鬼が登場している。

この論では、酒呑童子退治を扱った作品を仮に「酒呑童子譚」と名付け、その伝播の過程でどのように茨木童子が登場したのかに迫っていききたい。

なお、酒呑童子には酒天・酒顛・酒呑など様々な表記があるが、各伝本の題はその本の表記に合わせ、それ以外の部分では広く知れ渡っている「酒呑童子」の表記を用いる。

一

この章では、渡辺綱が鬼を退治する内容を含んでいる作品について考えていきたい。これらの作品では鬼に名前がなく、また鬼

と酒吞童子のかかわりも明記されていないので、どのようにして渡辺綱の鬼退治が酒吞童子譚に取り入れられるに至ったのかに迫る。

綱の鬼退治を扱った作品に『平家物語』があることは既に述べたが、他に『太平記』にも綱が鬼を斬る話が収められている。また、それらの作品から着想を得たとされる謡曲「羅生門」は大江山の鬼退治後に綱が鬼退治に向かうという設定である。

まずは謡曲「羅生門」の元となった二作品について考えたい。綱の鬼退治が『平家物語』の剣巻にあることは述べたが、全ての『平家物語』がその記述を有しているのではない。『平家物語』の伝本の中には、剣巻を有していないものもあり、また、別の段に剣巻が組み込まれているものもある。管見の限り最も古かったものは『屋代本平家物語』であり、一二五〇年頃の成立である。^{注5}

ここでは『平家物語』剣巻と『太平記』における該当部分の粗筋を述べ、後に比較する形式をとりたい。なお、便宜上、渡辺綱が鬼の腕を斬り落とすまでを前半、鬼が腕を取り返しに来るまでを後半として扱う。

『屋代本平家物語』 剣巻

前半

源頼朝の時代、人が失踪することや死体がなくなることが多くあった。それは嫉妬深さ故に宇治の橋姫となった公卿の娘の仕業であり、女を襲う際は男に、男を襲う際は女に化けた。そのような話のある中、ある夜源頼光は、郎党の中で随一の力を持つ渡辺綱を、髭切という剣を持たせて一条大宮へ使いにやる。使いの帰りに綱が一条戻り橋を通ると、若い女性が歩いており、五条に行くため送って欲しいと頼まれる。綱が引き受けて女を送っている途中、女は「実は自分の家は都の外にあるが、それでも送ってくれるか」と尋ねる。綱が了承の旨を伝えると、女は恐ろしい鬼となり、「私が行くのは愛宕山だ」と言い、綱の髻を掴み飛び上がる。綱は髭切で鬼の手を斬り、北野天満宮の回廊に落ち、鬼はそのまま愛宕山へ飛んでいった。

後半

腕を持ち帰ると頼光が驚き、清明を呼び今後の対応を尋ねる。清明は綱に鬼の腕を封じ、七日間物忌するように言う。物忌の七日目の夕方、綱の伯母が都の綱の家を訪ねてくる。綱は物忌の途中なので別に宿をとるように言うが、伯母が恨み言を言うので仕

方なく家に上げる。伯母に物忌の理由をきかれたので答える
と伯母は綱を責めたことを嘆き、そして鬼の腕を見たいと言う。綱
は物忌が終わった後に見せると言うが伯母が不満げにするので、
鬼の腕を取り出して伯母の前に置く。伯母は「これは私の腕であ
るから貰うぞ」と言い、恐ろしげな鬼となって宙へ飛び上がり、
虚空へ消えた。

『太平記』卷第三二「鬼丸鬼切の事」^{注7}

前半

源頼光の元へ、大和国宇多群の森に、夜になると化物が現れる
という知らせが届く。頼光は郎党の綱に化物の退治を命じ、秘蔵
の太刀を与える。綱は森へ行くが、化物が綱を恐れて現れないの
で、女装をして鬼をおびき出す。すると化物が綱の髻を掴み、宙
へ飛び上がる。綱は化物の腕を斬り落とす。

後半

綱が斬った腕を頼光に見せると、夢解きの博士が頼光に物忌を
するように言う。物忌の最後の日に頼光の伯母を名乗る女性が訪
れる。請われて彼女を招き入れた後、頼光は鬼の腕の話をする。
伯母がその腕を見たいというので、腕を伯母の前に置くと「これ
は私の腕だ」と言って、肘から先の切れた右腕に、頼光の持つて

いた腕を継ぎ合わせ、牛鬼へと姿を変えた。牛鬼は綱を引っさげ
て飛び上がるが、頼光が例の太刀で鬼の首を斬り落とす。牛鬼の
首は頼光を目がけて飛んでくるが、頼光はそれを太刀で受け、鬼
の首は地面に落ちて目を閉じた。

二つの作品を比べると、大筋の内容は同じであることが分か
る。細部は異なるが、同じ話が原型となり、別方向へと発展した
可能性も考えられるだろう。

異なる点としては、まず舞台となっている場所の違いがある。

『平家物語』では一条戻橋、『太平記』では大和国宇多郡である。
また、物語の前半で女装をする人物も異なっている。『平家物語』
では綱を欺くために鬼が女装をしているのに対し、『太平記』で
は鬼をおびき出すために綱が女装をしている。歌舞伎「茨木」や
後に挙げる酒吞童子譚では、茨木童子は女に化けたり、細首とい
う描写をされたりと、女性的もしくは中性的な印象が強い。その
点に関して言えば、後世の酒吞童子譚には『平家物語』剣巻の方
が強く影響していると言えるだろう。その他に目立つ点として、
後半の部分において、『平家物語』では物忌をするのが綱である
のに対し、『太平記』では頼光となっている。綱は頼光の郎党で
あるから、関係の深い二人が、伝播の過程で混同してしまった可
能性も考えられる。

このように、細部の違いは多いが、前半で綱が鬼の腕を斬り、後半で伯母に化けた鬼が腕を取り返しに来るという構成は同じものである。この中心的な話の展開が、綱の鬼退治では重要視されていたのであろう。

謡曲「羅生門」^{注8}

続いて、綱の鬼退治を題材とした謡曲「羅生門」について考えていきたい。この謡曲は観世小次郎の作である。成立年代については詳しくは明らかでないので、ここでは範囲が広がるが、信光の存命中として扱う。素材はいくつかの文学作品からとったとされているが、それについては後に考えたいので、ここでは触れずにおく。まず、概要を以下に記す。

大江山の鬼神を倒した後、源頼光・藤原保昌が、頼光の四天王を集めて酒宴を開く。頼光が一同に近頃の珍しい出来事を尋ねると、保昌が羅生門に鬼が出るという噂を話す。渡辺綱はそれを信じず、真相を確かめるために羅生門へ向かう。その際、羅生門に行った証として、札を置いてくるようにと言われる。綱が羅生門に到着し、札を置いて帰ろうとした時、背後から鬼神に襲われる。綱は応戦して鬼の腕を斬り落とす。鬼は「時を待ってまた取ろう」と言って空へ消える。

謡曲「羅生門」は、前述の二つの作品の、前半部分を発展させたものである。一番の違いは、後半部の鬼が腕を取り返しに来る場面を、鬼神の「時節を待ちて、また取るべし」という言葉に集約し、前半の鬼との戦いに重きを置いている点であろう。また、綱の鬼退治は大江山の鬼退治後とされており、綱が羅生門に行くことになる原因も、鬼退治後の酒宴での言い争いである。

羅生門に行った証として札を置いてくるという設定も、『平家物語』と『太平記』には見受けられないものである。これについては、島津久元氏が『羅生門の鬼』^{注10}で触れている平季武の武勇譚、『今昔物語集』にある産女の怪の影響の方が強いように思う。話の粗筋は、産女が出るという噂を聞いた季武がその正体を確かめることとなり、その場所に行った証として矢を立ててくると約束するものである。^{注11}

これらを踏まえて、綱の鬼退治を扱った三作品の関連性を考えていく。

まず『平家物語』と『太平記』であるが、これは同じ話、もしくは出来事が元になっていると考えていいだろう。異なる点も多々あるが、綱が鬼の腕を斬り落とし、後に鬼が腕を取り返しにくるという、作品の大筋が似通っているからである。綱は頼光の郎党であるから、関係の深い二人が、伝播の過程で混同してし

まった可能性も考えられる。

そして、『平家物語』と『太平記』の内容は似通っているのに対し、謡曲「羅生門」は話の前半に重点を置いており、更に『今昔物語』の影響も見られる。このことから、謡曲「羅生門」は伯母に化けた鬼が腕を取り返しにくる場面よりも、綱と鬼の対決に重きが置かれていると言えるであろう。『今昔物語』の影響については、作品の構成全般に言えることである。主題を綱の鬼退治にしているものの、構成は平季武の活躍を描いた『今昔物語』の影響をより強く受けていると言える。

次に注目したいのが、怪異が起こる場所である。謡曲「羅生門」では、名前の通り羅生門となっている。これは既に多くの方が言及している通り、羅生門が怪異性の強い場所であることに加え、鬼が住むとされていたことが理由であろう。羅生門と鬼を題材とした話はいくつかあり、『今昔物語』には鬼が玄象という琵琶を盗んで楼上で弾いているのを、博雅の三位が聴く話が収められている。また、『十訓抄』や『江談抄』には、都良香が作った上の句に、羅生門の鬼が下の句をつけたという話もある。これらの伝説を踏まえた上で、謡曲「羅生門」はその舞台をより鬼との結びつきが深い場所に移したのだらう。

中世において、能という芸能の与える影響はすさまじく大き

かった。こういった背景もあり、謡曲「羅生門」として成立した渡辺綱の鬼退治は、人々の心に深く刻み込まれたのであろう。しかしながら、ここでは後に茨木童子と呼ばれるようになる鬼の存在はあるものの、鬼に名前は付けられていない。謡曲「羅生門」において大江山の鬼退治との繋がりが確認できるが、『前太平記』にあるように、酒吞童子の眷属であると称されるには、まだ酒吞童子との関係性も薄い。謡曲「羅生門」が成立した時代では、綱の鬼退治と酒吞童子譚は別個の作品として語られていたと考えるのが妥当であろう。

二

この章では、成立年代の異なる酒吞童子譚を比較し、茨木童子が酒吞童子一の眷属と言われるに至るまでの変遷を追っていきたい。取り上げる酒吞童子譚は絵巻・金平浄瑠璃・御伽草子の中から選んだ。茨木童子の名前が『平家物語』『太平記』に登場しないことは前述の通りであるが、酒吞童子譚では、その存在・名前の有無に、内容と同様揺れがある。この論文では綱と戦う鬼が茨木童子と呼ばれるようになった経緯を追及したい。よって、前述の媒体の中から主要なものをいくつか取り上げ、その中での茨木童子の描かれ方に注目していく。

酒吞童子譚には多数の伝本が存在し、内容にも数え切れない差異がある。松本隆信氏はそれらを大江山系、伊吹山系A、伊吹山系Bの三つに分類している。^{注12} 前から順に酒吞童子の住処を大江山とするもの、伊吹山とするもの、酒吞童子の住処を伊吹山とした酒吞童子の出生譚というものである。ここでは松本氏の分類に従って酒吞童子譚を分類した上で、系統ごとの違いを見ていく。

比較の前に、酒吞童子譚の粗筋を確認したい。なお、前述の通り酒吞童子譚には多数の伝本が存在し、内容にも差異がある。そのため、ここでは酒吞童子譚の中でも特に広く知られている洪川板『酒吞童子』を取り上げ、粗筋を記す。

洪川板『酒吞童子』^{注13}

都で人が失踪することが多くあり、その元凶の鬼神（酒吞童子）の討伐が源頼光に命じられる。頼光は藤原保昌と、自らの郎党の四天王と共に鬼退治に向かう。出発前に一行は神の力を借りるために住吉・熊野・八幡の三社に詣でる。土地の者に尋ねながら鬼の住処に向かうと、岩穴の中に三人の老人がいた。三人は一行が詣でた三社の神であり、鬼が飲めば毒、人が飲めば力となる酒と、兜を与えて消える。酒吞童子の館に着くと、色が薄赤く、長身短髪の酒吞童子が現れる。童子は来客を珍しく思い、一行を

酒宴に招く。酒吞童子は酒と称して血を、肴と称して人肉を勧める。頼光と綱がそれを口にしたので、童子は気を良くする。続いて頼光が神に与えられた酒を献ずる。童子はそれを飲み、酔って昔語りを始める。その内容は都の頼光とその四天王が気にかかっていることとであり、童子の眷属である茨木童子が渡辺綱と戦い、腕を斬られたことにも触れる。その後童子は寝所に下がる。一行も童子の寝所へ向かうと、童子は今までの姿と異なり、異形の姿となっていた。そこに三社の神が現れ、酒吞童子の手足を四方の柱へ繋ぐ。頼光が酒吞童子の首を斬ると、その首が頼光を目がけて飛んでくるが、兜を恐れたので襲われるには至らなかった。その後、庭へ向かうと、茨木童子が一行に襲いかかる。綱がそれに「腕前は知っているだろう」と言って応戦する。綱が茨木童子を押さえると、頼光がその首を討ち落とす。この様子を見て他の鬼たちも襲ってくるが、一行はそれに勝利する。一行は捕らわれていた姫君たちを解放し、頼光の手柄は広く評価される。

大江山系

大江山系の伝本には、逸翁美術館所蔵の『大江山繪詞』^{注14}、古浄瑠璃の内容を奈良絵本とした『酒天童子』^{注15}、金平浄瑠璃『しゆてんどろじ 新宮内正本』^{注16}、洪川板『酒吞童子』などがある。まず

はこれらの伝本の概要を記す。

香取本は現存する酒吞童子譚の中で最古のものである。成立年代は『室町時代物語大成』^{注17}において横山愛氏が「南北朝から室町の初期にかけてのものと思う」と述べているので、それに従い、ここでは十四世紀以前とする。なお、香取本はかなり多くの散逸を有する上、他の酒吞童子譚には見られない独自の記述も少なくない。また、茨木童子についての記述も見受けることができない。この論では茨木童子という名前が登場する年代を明らかにするため、香取本は比較の対象から外す。

奈良絵風の絵巻『酒天童子』は古浄瑠璃の内容を奈良絵本としたものである。成立については『金平浄瑠璃正本集第一』^{注18}の解題に従い寛文以前とする。

金平浄瑠璃『しゅてんどうじ』新宮内正本は、坂田金時の子、金平ではなく、源頼光を主人公とした作品である。この正本は刊記を有しており、そこには「右しゅてんどうじは新宮内うたがひなき正本なり 寛文三年三月吉日」とある。よって、成立は寛文三年として扱う。

洪川板『酒吞童子』は洪川清右衛門板の『御伽草子』（『御伽文庫』とも）二三編に含まれる作品である。『続日本絵巻大成一九』^{注19}にある榊原悟氏の『大江山繪詞』小解によると、洪川板の成立は

享保年間である。洪川板によって頼光の鬼退治は「婦女童幼の教養を磨き、またつれづれの慰みものとして、いつそう幅広い享受層を得る」^{注20}に至ったことだ。絵巻ではなく版本であることから、他の酒吞童子譚よりも広く流布していたと考えることが自然であろう。

大江山系の三本に見られた特徴は以下の通りである。

まず、一行は鬼の討伐に向かう前、神の力を借りるために八幡・住吉・熊野の三社に詣で、その加護を得ようとする。その神々が変化して一行の前に姿を見せる場面では、三柱の全てが翁へと変化している。そして、酒吞童子の住処に向かうにあたり、後に挙げる伊吹山系Aには見られる岩穴を抜ける描写がない。この岩穴は門のように内と外、人間の領域と鬼の領域を分ける要素を持つていると考えられる。従って、大江山系の伝本では、鬼の世と人の世に明確な境界がなく、人の世の延長線上に鬼が存在している」と解釈できる。更にこの描写は最古の香取本には記述があることから、描写が無くなってしまう経緯は興味深い。

肝心の茨木童子についてであるが、大江山系では三本全てに名前が登場する。金平浄瑠璃『しゅてんどうじ』では都で綱と戦った鬼が茨木童子と同一の者であるという明確な記述は無い。しかし、都での綱と鬼の戦いは、三本ともその記述を有している。

奈良絵風の絵巻と渋川板に限れば、さらに以下の点も重なってくる。冒頭で姫が攫われた原因を占う者は村岡のまさときであり、酒吞童子退治前の祈祷には、鬼退治に向かう六人全員が参加している。土地の者に鬼の住処を尋ねた際の反応も、その場を知っているというものである。酒吞童子の四天王もこの二作品では星熊・虎熊・熊・かね、と同じ名前である。神に授けられた酒の効力も、鬼には毒で人には力となるものである。童子が気に入っている姫や、斬られた酒吞童子の首が頼光に襲いかかる点も、どちらの伝本でも記述されている。

伊吹山系

伊吹山系の伝本には先にも述べたように、AとBの二つが存在する。前者にはサントリー美術館所蔵『酒傳童子繪巻』^{注21}や大東急記念文庫『しゅてん童子』^{注22}、後者には赤木文庫旧蔵『酒典童子』^{注23}などがある。こちらについても、まずは伝本ごとの概要を確認する。

Aに分類されるサントリー美術館本は、古法眼本とも呼ばれる。香取本の成立とは時期が離れているが、伊吹山系の伝本の中ではかなり古いものである。この本は奥書を三条西実隆^{注24}が記しており、そのことは『實隆公記』^{注24}に詳しい。それが享祿四年のこと

なので、成立したのはそれ以前となる。

大東急記念文庫『しゅてん童子』は刊記を有していないが、大東急記念文庫『全書叢刊』中古中世篇第二巻物語草紙Iに寛永頃とあるので、そちらを信頼する。

伊吹山系Bに属する赤木文庫旧蔵『酒典童子』は、奈良絵本である。成立については『室町時代物語』四の解題に「その絵柄から見ると、寛永前後のものとおもはれる」とある。また、伊吹山系Bの伝本は酒吞童子の出生譚であるため、他系統の酒吞童子譚と大幅に内容が異なる。茨木童子についての記述も有していないので、この論では香取本と同様、比較の対象から外す。

それでは、伊吹山系Aの特徴について考えていく。

伊吹山系Aの伝本では、鬼退治の前の祈祷には、保昌以外の五人が向かっている。謡曲「羅生門」を始め、保昌という人物は頼光と並んで登場しており、立場としては四天王より上にあたる。それにもかかわらず、保昌をある種ののけ者にしていることは興味深い。その他には、鬼の住処を土地の者に尋ねた際、皆が知らないと答えることが挙げられる。なお、三柱の神の変化の姿は五十歳ぐらいの男二人と山伏一人という姿となっている。また、神から与えられた酒の効果は、鬼にも人にも毒というものだ。酒吞童子に仕える四天王の名前も、そのうちの一匹がサントリー美

術館本では「御號」、大東急記念文庫本では「こかう」となっているが、それ以外は桐王・阿王・羅刹という同一の名である。さらに、酒宴の席で酒吞童子に酌をするのは綱であり、舞を踊るのは鬼の手下と金時である。加えて、童子の手足を縛る際は、大江山系では神通力でなされるのに対し、伊吹山系Aでは神からは鎖を渡されるだけで、鬼を縛るのは頼光たち一行である。最後に、斬られた鬼の頭部は、首だけになってもなお頼光に噛みつこうとする。

伊吹山系Aで頼光たちは岩穴を通った先にいる、全く性質を異にする鬼と戦うのに対し、神の恩恵は少ない。そのため、自らの力で異形を退治するという印象が強い。また、酒吞童子の死後、鬼の住処が廃れ、眷属の鬼に神通力が無くなるという描写も有している。これは頼光たち一行の功績を、具体的かつ明確に表していると言えるだろう。

また、伊吹山系Aの伝本では、茨木童子という名前を見ることができなかった。大東急記念文庫本で、酒吞童子が都に遣わした眷属が頼光の郎党に悩まされたことがある、という記述があるが、直接的に都で綱と戦った鬼がいることを示す描写は無い。

大江山系・伊吹山系Aのどちらにも共通する要素として、四天王の中で渡辺綱が際立って目立っているということが挙げられ

る。四天王が個別に名前で挙げられることは少なく、綱以外では伊吹山系Aの伝本で、鬼と宴会をする際に鬼と共に舞う金時が取り上げられることと、酒吞童子を倒した後、綱に鬼が襲いかかる際に、大東急記念文庫本で、季武が別の鬼に襲われることが書いてあるくらいである。

しかし、綱は酒吞童子に酒と偽って出された血を、四天王の中で唯一飲み干す人物である。また、伊吹山系Aの二本では、酒吞童子の一行を倒すという発言を聞いて、怒りを露わにする綱が描かれている。他の場面を見ても、頼光の四天王がそれぞれに何度も描かれることはない。やはり綱は、酒吞童子譚において、他の四天王に比べ、より重要な存在であると考えられる。

このように、伝本系統ごとに、酒吞童子譚の内容には違いがある。しかし、これ以外にも、成立年代によって分類できる点もある。例えば大江山系の奈良絵風の絵巻と伊吹山系Aの二本では、酒吞童子の先払いの姿が、三本全てで三つ目の異形の者となっている。また、酒吞童子が登場する時に、生温かく臭い風が吹くという描写は、系統の異なる奈良絵風の絵巻と大東急記念文庫本の双方で見ることが出来る。酒吞童子を討った後、酒吞童子の首が頼光に噛みつくという描写は伊吹山系Aの二本に見られるものであるが、金平浄瑠璃『しゅてんどじ』は大江山系であるにも関

ならず、その記述を有している。他にも大江山系・伊吹山系で細部の内容が入り乱れているということが多々ある。このことから、大江山系・伊吹山系はそれぞれの特徴を持ちつつも、伝播の過程でそれを越えて混ざりあっていたと考えられる。

以上のように見ると、大江山系の伝本のみ、茨木童子という名を有しているという結果となる。しかし、今回比較した大江山系、伊吹山系のそれぞれの伝本の成立年代を考えると、安易にそう結論付けてしまうのは問題があるだろう。確かに、茨木童子の名を初めて発見することができるのは大江山系の伝本であり、伊吹山系の伝本では、それを確認することが出来なかった。しかし、伊吹山系の伝本にも、茨木童子と名のつく鬼の原型とも言える鬼が存在している。例えば、酒吞童子の死の後に綱に挑む鬼として、サントリ美術館本では「御號」、大東急記念文庫本では「ゑんほう」という鬼がそれぞれ登場する。また、大東急記念文庫本では、酒吞童子の口から、都に遣わした眷属が頼光の郎党に悩まされたことがある、という旨の言葉が発せられる。サントリ美術館本では、頼光の都での活躍についてはただ「朝敵を倒す」という記述しかないのに対し、それより後に成立した大東急記念文庫本では、より具体的な内容となっている。大東急記念文庫本のこの場面では酒吞童子の眷属、頼光の郎党共に名前は明ら

かになっていない。しかし、この時代にはすでに謡曲「羅生門」が成立していたことから考えて、ここから綱の鬼退治を連想することは自然と言えるだろう。よって、酒吞童子譚に茨木童子と渡辺綱の戦いが組み込まれることの原型になっていると考えられる。以上のことを踏まえると、酒吞童子譚における茨木童子の登場は、伝本系統による独自の記述ではなく、酒吞童子譚全体を通して変化してきたものだと考えるのが妥当であろう。

おわりに

今回取り上げた作品を踏まえた上で、茨木童子の登場について考察していきたい。

『平家物語』や『太平記』には綱と戦う鬼の描写はあるものの、茨木童子の名前は登場しなかった。また、『太平記』と同時期に成立した酒吞童子譚である香取本『大江山繪詞』にも茨木童子の名前は登場せず、後の酒吞童子譚にあるような、鬼退治後に綱に挑む鬼も見受けられなかった。これらのことから一四世紀ごろの酒吞童子譚と、綱と戦う鬼は、綱という人物が共通するだけであり、話としては繋がりを持っていないかったと考えられる。

その後、謡曲「羅生門」が成立する。綱の鬼退治を、大江山の鬼退治後としたこの作品により、酒吞童子譚と綱の鬼退治の間に

繋がりが生じた。しかし、その繋がりは時系列という点のみのことであり、後の酒吞童子譚のように、内容が入り組んでいるのではない。綱と戦った鬼はただの名の無い鬼であり、酒吞童子の眷属であるという描写は少しも見られないのだ。この段階でも、酒吞童子譚と、綱と戦う鬼は、異なる独立した話であつたと考えるのが妥当であらう。

謡曲「羅生門」とほぼ同時期に成立したサントリー美術館本にも茨木童子という名前は登場しない。都で綱と酒吞童子の眷属が戦つたと言う記述も無いため、酒吞童子譚と綱の鬼退治の繋がりは、謡曲「羅生門」よりも薄いと言える。しかしこの伝本では、頼光たち一行が酒吞童子を討つた後に、綱に挑む鬼が存在する。名前は御號であり、サントリー美術館本では鬼の四天王の一人として数えられている。酒吞童子譚における茨木童子は、都で綱と戦う場面と、酒吞童子を討つた後に綱に勝負を挑む場面の二か所に登場する。サントリー美術館本では前者の描写は存在しないが、御號が綱に挑む展開は後者のモデルになっていると考えられる。

その後に成立した大東急記念文庫本にも、茨木童子の名前は存在しない。しかし、サントリー美術館本と同じく、酒吞童子を討つた後に綱に勝負を挑む鬼がいる。鬼の名前はゑんはうであ

り、サントリー美術館本とは名前が異なっている。しかし、綱に挑むという描写は、サントリー美術館本での御號と重なる。そして大東急記念文庫本は、都に遣わした（酒吞童子の）眷属が頼光の郎党に悩まされた^たという意味の記述を有している。眷属が茨木童子であるとも、頼光の郎党が渡辺綱であるとも書いていないため、この鬼が綱と戦つた鬼であるとは断言できない。しかし、酒吞童子譚に綱の鬼退治が結びつけられることとなつた一つの原型ではないだろうか。

この論文で取り上げた酒吞童子譚のうち、茨木童子が綱と戦つた鬼であると明記しているもので最古の伝本が、寛文以前の成立とされる奈良絵風の絵巻『酒天童子』である。明確な年代が分かっているものでは、寛文三年三月成立の金平浄瑠璃『しゅてん童子』となる。どちらの伝本でも、酒吞童子を討つた後に綱に挑む鬼は茨木と書かれている。都で綱と戦つた鬼については、奈良絵風の絵巻『酒天童子』でのみ茨木であると書かれている。しかし、金平浄瑠璃『しゅてんどうじ』と同時期に成立している、ほぼ同内容の大東急記念文庫蔵の金平浄瑠璃『しゅてん童子』（出羽掾正本）^{（まがら）}では、茨木童子を都に遣わしたと明記されている。よつて、この時代には、茨木童子は酒吞童子の眷属であり、都で綱に腕を斬られた鬼と同一であるという認識になっていたと考えられる。

洪川板は奈良絵風の絵巻『酒天童子』とほぼ同内容であるため、都て綱と戦う鬼も、酒吞童子を討った直後に綱に襲いかかる鬼も、茨木童子であると明記されている。様々な変遷を経て確立した、酒吞童子譚の中の茨木童子という存在は洪川板にも受け継がれ、版本という形でより多くの人へと広まったのであろう。

以上のことから、酒吞童子譚と綱の鬼退治は、成立当時は異なる話であり、謡曲「羅生門」によって初めて時系列の繋がりが生まれたと考えられる。そして伝本が様々に変化する中で、「酒吞童子側の四天王の一匹が綱に挑む」、「酒吞童子の眷属が頼光の郎党に悩まされる」という二つの描写が発展した。そうして鬼の腕を斬ったという逸話を持つ渡辺綱が、頼光との関係性によって無理なく酒吞童子譚に組み込まれたのだろう。

これらのことを踏まえた上で、酒吞童子譚において、綱と戦った鬼が茨木童子という名を持ち酒吞童子一の眷属とされるようになるのは、大東急記念文庫が成立した寛永ごろから、奈良絵風の絵巻『酒天童子』が成立する寛文以前の時代であるとして、この論を終えたい。

注

注1 乾克己ほか『日本伝奇伝説大事典』（一九八六年、角川書店）

注2 注1と同書による。

注3 大會根章介ほか『日本古典文学大辞典』（一九九八年、明治書院）による。なお、注4に挙げる『前太平記』の凡例では、ほぼ全ての『前太平記』が無刊記本であるためこれが否定されているが、本論では茨木童子と綱に腕を斬られる鬼が同一視される年に迫りたいので、管見の限り最も古かった天和元年頃成立という説をとった。

注4 板垣俊一『叢書江戸文庫三『前太平記上』（一九八八年、国書刊行会）より引用。

注5 佐藤謙三・春田宣『屋代本平家物語（下巻）』（一九七三年、桜楓社）

注6 渥美かをる『笠間叢書九五 平家物語の基礎的研究』（一九七八年、笠間書院）による。

注7 長谷川端『新編日本古典文学全集五七 太平記四』（一九九八年、小学館）第三二卷「鬼丸鬼切の事」を参考にした。

注8 横道萬里雄・表章『日本古典文学大系第四一 謡曲集下』（一九六三年、岩波書店）による。

注9 注8と同書による。

注10 島津久基『羅生門の鬼』（一九七五年、平凡社）

注11 森正人『新日本古典文学大系三七 今昔物語集五』（一九九六年、岩波書店）を参考にした。

注12 斯道文庫論集第一輯 松本隆信 室町時代物語現存本簡明目錄（一九

六二年、慶應義塾大学斯道文庫）による。

注13 大島建彦『日本古典文学全集三六 御伽草子集』（一九七四年、小学館）所収。

注14 「国語・国文」第六卷第九號 小川壽一「香取本大江山繪詞に就て」（一九三六年、星野書店）所収。

注15 横山重『古浄瑠璃正本集第一 増訂版』（一九六四年、角川書店）所収。

注16 室木彌太郎『金平浄瑠璃正本集第二』（一九六六年、角川書店）所収。

注17 横山重・松本隆信『室町時代物語大成第三』（一九七五年、角川書店）による。

注18 注16参照。

注19 小松茂美ほか『続日本絵巻大成一九 土蜘蛛草紙・天狗草紙・大江山絵詞』（一九八四年、中央公論社）

注20 注19と同書より引用。

注21 東京大学史料編纂所『大日本史料第九編之二〇』（一九九四年、東京大学出版会）所収。

注22 横山重・太田武夫『室町時代物語第四』（一九六〇年、古典文庫）所収。

注23 注22と同書に所収。

注24 注21と同書に所収。

注25 注16と同書に所収。

（かわなべ ひとみ 二〇一一年 日文学）